

たとえば、私たちは 「よく働きなさい、勉強しなさい、努力すればするだけのことはありますよ、“なせばなる” ですよ」と教えられる。

しかし、**サマセット・モームの『蟻とキリギリス』**という小説はまったくその反対のことが人生にはある、という教を書いています。

秀才で弁護士の子と、女たらしで博打好きのぐうたらな弟が登場します。兄はこつこつ働いて手堅く生活し、それなりにいい生活をする。ところが弟は口がうまくて人に好かれるのをいいことに、みんなから借金したり、金持ちの未亡人をたらしこんだりして、夢のように贅沢な生活を手に入れる。そんな弟を忌々しく思いながら、兄は何度も弟のしでかした不始末の尻ぬぐいをしてやる。何しろ信用が第一の弁護士ですから、弟の不始末であっても悪評を立てられると困るわけですね。

『蟻とキリギリス』 といえば、夏も働き続けた蟻が冬の暮らしにも困らず、夏に遊びほうけていたキリギリスは蓄えもなく冬には死ぬ、という因果応報の寓話が教訓的現実だと思われているでしょう。ところが、この遊び人の弟が大金持ちの未亡人と結婚するんです。そして、相手は間もなくころりと死んで、弟に現金とロンドンの屋敷、田舎の別荘、高級なヨットまで、莫大な遺産を地類すという鮎助です。

その時、兄弟を比べてみると、兄貴はよぼよぼの老人のように見えて、弟のほうがずっと若くて生き生きとして見えまして、という物語なんですね。

霞が関に詳しい方から聞いたところによると、経歴秀才の中でも十人に一人くらいは臨機応変に対処できるほんとうの秀才だそうです。ところが、秀才は全員、自分がその一人だと思っているので、始末に悪いんですよ、ほんとうに。

ですから、東大法学部のワルクチはいくら言っても大丈夫。「例外はありますけど」と言っておけば、必ず自分が例外だと思いますから。

昔からつながりのあったマダガスカルには、今でも口唇口蓋裂という生まれつきの病気を持って生まれてきた子が、形成の手術を受けられないままです。昔は 「みつくち」と呼ばれて、唇や上あごにさまざまな裂傷があるんです。食事もうまくとれませんし、発音が不明晰になります。マダガスカルには十分な技術を持った形成外科医もいず、国に健康保険の制度などないので、貧しい親たちはどんな医療も受けさせられません。

そういう子供たちに、昭和大学のドクターたちが無料で手術をしてくださるプロジェクトができました。JOMASを「卒業」した四人が「4B会」というのをつって、そのプロジェクトのサポートをしています。無一文で前の組織を出てきたので、資金を集めるのも一から始めました。四人とも、八十歳にして再就職したわけです。

人の好意を期待する、というのは、不幸のもとです。期待すると裏切られることがあるでしょう。期待すればするほど、不幸が増えるわけですね。

近ごろは、「引きこもり」の大人も少なくないそうですが、それは小さい時から少しずつ嫌なことやつらいことをさせる癖をつけていないからです。私たちの子供のころは、嫌なことばかりしないと、今日のご飯が食べられませんでした。今は、嫌なことはほとんどしなくても、食事に困らないし、冷暖房のきいた家を追い出されることもないでしょう。

面白いことに、自信というものは、つらいことと嫌なことができた時につくものですが、そのチャンスすら失ってしまったわけです。

最近では、自分の得になることしかしない、与えることは損だと考えている中高年も目立ってきました。いよいよ戦後教育のツケがまわってきたんですね。

このごろは、部分的にあきらめることもできるようになってきました。前は、駄作を書くのが猛烈につらかったのですが、今はあまりつらくない。「そうだ、人間というのは駄作も書くもんだ」と思うようになりました。

いつか私は、たくさん書き過ぎるから駄作を書くようになるんだ、と思ったんです。ですから十本の短篇を書くのをやめて、一本だけにすればいいのかしらね、と言ったんです。そうしたら、三浦朱門が笑って「なあに、九本の駄作を書くから、ややましな一本が書けるのさ」と言うんです。確かにそういう面もあるんですね。

その時によるのですが、編集者に「あんな駄作を渡しちやつて、ごめんなさいね」と言ってもいいですね。そう言ったらお互いが気まずくなると思ったら、名作を渡したような顔をしている。黙ってればいいんです。

人はそれくらいの形で相手をだましてもいいと思いますよ。駄作を読んだからって、下痢をするというものでないでしょう。そういうふうを考えるんです。

心の内まで平気なわけではありませんよ。そういう時には、しおれているわけです。でも、そのうち時間が経つと、失敗したことを忘れて、またもう一度やってみよう、と思うようになる。それも芸のうちでしょうね。

そして、心の中のどこかで、ああ、悪いことをしたから、もし今度あそこで書かせてもらうことになったら、いい作品を書かなければいけないな、と一応思っているんですね。思っていて、その次も駄作になるかもしれないけれど。

話をもとに戻すと、「IT中毒」が怖いのは、人と交わらなくても済む世界だからですね。人間が生活するという事は、基本的には生身の人々と関わり合いながら生

きていくことです。それは多くの場合、おきれいごとでは済みません。対立したり、誤解されたり、裏切ったり、傷つけられたり、殺したりすることさえある。

電気がない、水道がない、食べ物がない、病院がない、バスがない、学校がない、仕事がない、というような、ないない尽くしの土地で見たり聞いたりする話は、胸を打たれるものばかりでした。今の日本人が持っているもののありがたさが身にしみるのも、そういう現実を知ったからです。

日本でも昔は、焼け出された人がいたら、親戚や友だちが「うちにおいでよ」と言って、さし当たり着るものもあげて、泊めたものです。子だくさんでも、家が狭くても、そうするのが当たり前でした。

今、私が、夫婦ゲンカをして追い出されるか家出をした時、転がり込めて、お風呂に入れてくれて、ご飯を食べさせてくれて、寝ていきなさいと言ってくれる友だちが二人や三人はいます。私もまた同じように、「うちにいらっしやい。思い詰めたっていい考えは浮かばないから、とにかく、お風呂に入って、よく食べて、ゆっくりお休みなさいよ」と声をかける友だちが何人もいます。

人間関係ほど、難しいものはありません。どんな人でも、必ず誰かに好かれ、誰かに嫌われている。できたら誰にも嫌われないほうがいいけれど、現実はそのようなものでしょう。

私は友人に恵まれて、独身時代からずっと続いている友だちもいれば、六十を過ぎてから知り合って、ほんとうにいい友だちになった人もいます。でも、長く付き合っているうちにダメになる場合もありました。

私は長い人生で二人から「あなたとは、もう付き合わない」と、はっきり言われたんです。別に何か決定的な出来事があったわけではなく、たぶん温度差のようなものが生まれたんでしょうね。しかも私のほうから絶交したわけではないので、私は仕方なく受け入れることにしました。

心ならずも結果的にそうになったら、それとなく相手から遠ざかり、相手の気分を悪くしないほうがいいでしょう。そして、私はあまりそのことを深く悲しまないようにしてきました。

自分に変なところがあるのはよくわかっていますから、それを許してくださる方と許してくださらない方があって、許してくださる人と、感謝してお付き合いしていくほかはないんですね。それが自然ではないかと思っています。

家族と少数の友人だけは、長い年月かかって、あるがままの自分を認めてくれる。だから貴重な存在なんですね。

そもそも人間は、一人一人が違う個性を持っています。性格も違えば、考え方や感

じ方も異なるし、生活上の好みや習慣も人それぞれです。人は自分とは違う、という深い理解がないと、「そのままでも相手を受け入れる」といういい人間関係は続かないでしょうね。

もちろん友人関係にも相性はあるもので、現実的な考え方をする人でなければ付き合えないとか、反対にお金の話をする人とは、どうもウマが合わないといったことはあるでしょう。人の生き方に好みを持つのは仕方ありません。立場を変えれば、誰でも、少しは相手のカンにさわるような生き方をしているものです。

しかし、あまり生き方の美学が違い過ぎると、うまくいかないかもしれない。

はっきり言うと、「お金の関係」ができると、もう友人じゃなくなるんです。また、ろくに知らない人にお金を貸してと言う人は、そのことだけでおかしいですからね。

こういう寛大さがなかったら、結婚生活は地獄になると思います。お互いに理想はあるだろうけれど、現実には、その通りにはいきません。ですから、その通りにいかないということを、夫婦で笑って楽しむような空気がないと、いたたまれないと思うんです。

私は、両親の地獄のような結婚生活を見ていましたから、結婚相手に求めたものは唯一、「寛大さ」でした。三浦朱門は、命に関わるようなことでもない限り人は皆それぞれ、という考えの人ですから、私がしたいと思うことを妨げないし、何かできなくても文句は言いません。家事もできるから、私が外出しても、原稿を書くのに忙しくて夕食の支度ができなくても、平気です。

女性に多いパターンですが、何でも同じ、何でも相手のことを知っていないと気が済まない人がいます。「あなたもこう思うわよね」と同じ意見を強要し、いつも行動をとともにしたがる。ひどい人になると、「私に黙って旅行に行った」などと怒り出す。こういうのは友人関係ではなく、単に群れているだけです。自分という「個」がきちんと確立していないから、人と同じでないと安心できないわけですね。

私は六十四歳から日本財団に会長として九年半勤めました。それまで組織の中で働いた経験は一度もありませんでしたし、不特定多数の人と会う機会もほとんどありませんでした。私はもともと社交には向いていなかったのです。

一見社交的のように見られますが、性格は小さい時からずっと自閉的で、何とか人付き合いをせずにできる仕事はないかと考えていました。その仕事が小説家だったんですから。

単なる社交なら避けることもできるけれど、財団にせよ勤めに出れば、仕事上の任務として逃げるわけにはいきません。一日に数百人の人と会う日もあったんです。そ

ここで、頭の後ろに特別なスイッチがあると思うことにしました。日本財団の会長として働く時は、そのスイッチをパチン！ と入れる。ただ今から別の人間、というふう
に、いつもと違う自分に切り換えるわけです。

ところが最近、上司のご機嫌取りをする「イエスマン」が多くなったんですね。オリンパスの粉飾決算が明るみになった時、元社長のイギリス人、ウッドフォード氏が、「日本人の経営陣はイエスマンばかりだったから、あのような結果になった」と
談話を発表していましたが、確かにそういう面はあるでしょう。

イエスマンはどの分野にもいます。日本の官庁にも会社にもマスコミにも、芸術の
世界にも増えました。学界にも、出世のためなら何でもする醜悪なイエスマンが多
くなった、と教えてくれた人もいます。

理由は明白です。戦後、物質的な安定を人生の目標にする人が圧倒的に増えて、も
のを言う勇気を失ってしまったからです。自分はこういう生き方が好きだ、と思い、
こうあるべきという信念を持ったら、言うべきことは言い、時には命を賭けても自分
の信念を通すべきだ、などと誰も言わなくなったんですね。

はっきり言って、イエスマンでは幸せになれないと思います。会社をクビになっ
たら大変ですから、いくつかは「ノー」と言って、あとは従う「分割イエスマン」とい
う手があるかもしれません。しかし、「百パーセントイエスマン」で、自分を全部殺
してしまったら終わりです。

・・・寛大も「自分を殺す」という意味では同じではないか。

有名なら信じるとか、反権力者はヒューマニストで、貧しい人は心がきれいとか、
いとも簡単に決めてしまう人がいるけれど、そんなものじゃありませんからね。それ
は、人間というものはなかなか相手を知り得ない、という恐れを知らないからです。

松下幸之助さんは、私財を投じて創設した政治家の養成学校・松下政経塾の面接試
験に必ず同席したそうです。自分から尋ねることはほとんどなく、質問する時は決ま
って「君、辛抱できるか？」と尋ねたといいます。辛抱というのは、すべての仕事の
土台なんですね。

小説家の仕事も例外ではないんですよ。駆け出しのころは、コツコツ書いた原稿を
突っ返されたり、「君は、面白い誤字を書くねえ」とか「いやあ、名作という気もし
ないではないけどね」とか言われたり。名作と迷作は発音が同じですから怖いよ。
労りだか、励ましたか、嫌がらせだか、わからないような批評をする怖い編集者は
いっぱいいました。

そういう名編集長や大編集者たちの中で、びくびくしながら鍛えられていったん
です。その方たちが、悪意で言っているのではない、ということがわかっていましたか

ら。

私たちの世界に限らず、仕事は**自分を鍛えていくしかありません**。

何かあった時は政府や国家がやってくれるだろうと期待していたら、はっきり言って、ひどい目にあうと思います。どんな場合も、自分のことは自分でやろうとするのが基本です。もっと言えば、**人生は個別に才覚で生きていくほかないのです**。

私のように普通の老人だったら、少なくとも最後まで自分の生きることだけは何とかするという目安に、**自分を鍛え続けたいといけません**。妻が先に死ぬかもしれないのに、炊事一つできない男などというのは、かなり問題です。

高級なことはしなくてもいいですから、自分でご飯を炊いて食べられ、身のまわりをちょっと片付けたり、洗濯したりすることができる。その程度のことができなければ、人間を保つことはできないと思います。

不幸のない人生はないのだから、不運を生かせる才能は非常に大切です。

足を折るのも人生、健康も病気も、死に至ることもひっくるめて人生です。失恋や受験の失敗、会社の倒産、家族の病気や死別など、どんな願わしくない結果にも、深い意味を見つけ出さなくてはいけない。災難をただ災難としてしか受け止めなかったら、それは非運に負けたことになります。何がどうあっても、私たちの**望まぬ試練が、私たちを強める**ということは**真実**なんですね。

私は子供の時、母の自殺未遂の道連れになりそうになって死にそこなった時以来、絶対に自分では死なないような心理状態になっています。自殺は芝居がかっていて嫌ですしね。「死んでやる」というのは、生きられない人に対する残酷な嫌みだと思いました。

もちろん自殺者は、まわりのことなど冷静に考えられない一種の病気だったかもしれないし、あらゆることと闘った末の最期だと思いますから、深い同情もあります。

しかし、世の中にはどんなに生きてくても生きられない人がいる。